

いるが、全道平均値は28本であり、農家によっては40本もある。聞いてみると、20本説から40本説まで飛び出し、何を目標にしているのかとらえどころがない。25本以上にするには基肥を増やすか6月の追肥が必要である。この最も重要な収量構成要素を放任しておき、一等米を100%出荷しようというのは矛盾している。結果として半強制的に1.95mmのふりいでふるえという村八分的な非民主的なことがおこり、余りにもふるわれる量が多いと、2等米でも仕方ないと、真剣さのない運動になってしまう。結論的に言って一等米を100

%にする計画的な栽培技術マニュアルを作り、皆がそれを了解して守るようにすべきだ。

筆者がマニュアルとして提出しているのは、イ) 成苗、ロ) 5月23日までの田植、ハ) 標準施肥で追肥なし、ニ) m²当たり23株（株間11cm）、ホ) 株当苗数4本、ヘ) 株当有効茎数23本（24本で無効茎数は1本）、ト) m²当たりモミ数は3万5,000、などを基本とし、「一等米100%生産技術30項」というのを作成した。必要なら配布すると言ったが、これまでに要望があったのは^{ムカワ}鷓川町だけだった。だから品質論を言うのはナンセンスなのである。

開発途上国での疫病の脅威

1993年10月、世界銀行での農学者の会議において、きわめて危険なジャガイモの病害が世界的に広く発生していると報告された。この病害は新型のジャガイモ疫病（*Phytophthora infestans*）で、19世紀にアイルランドで本病により飢饉が発生したことは有名であるが、現在でも先進国・開発途上国双方のジャガイモ生産者にとっては大きな脅威となっている。このたび報告された新型のジャガイモ疫病は、生産に大きく影響をおよぼすにちがいない。またジャガイモは主要作物のなかでもっとも多く多くの農産を必要としているため、その使用量を減らすようにいろいろと工夫をこらし、努力が払われているが、それさえも無にしてしまうおそれも十分にある。

専門家によれば、この新型疫病は1970年代末頃にメキシコからヨーロッパに伝播し、そこから感染種いもの販売ルートをとおしてひろまっていったと思われる。

通常A2型とよばれる新しい病群は、以前アイルランドで飢饉をおこさせたA1型よりもはるかに強烈で脅威的であり、とくにアフリカでは、農民が農薬・散布器具等に十分な金を支出することができないため影響が大きく、食糧増産計画をくるわせることになるのではないかと憂慮されている。

同年10月、ニューヨークタイムス紙・エコノミスト紙ほか、30以上の欧米の新聞雑誌がA2型疫病について報道し、また、この緊急対策をたてるための会議が'94年2月にメキシコで開催された。

現在までも、疫病群がもっとも多く発生しているメキシコで抵抗性の系統が選抜されて

きたが、従来からこれら研究調査事業に従事してきた「国際疫病研究計画」（The international late blight testing program）の見なおしを行いながら、事業を推進することで合意がなされている。

多くの研究者・国際協力関係者は、ジャガイモ増産を含めた食糧需給計画をすすめるうえで、疫病はもっとも重大な制限要因になると考えてきた。本病の被害を減少させるうえでもっとも容易で効果的な手段は、殺菌剤の使用であり、北の先進国ではこの手段をとり入れるに際して、環境問題への関心を、より深めることはなからうが、南の開発途上国にとっては、経済的にみて好ましいことではない。

このような国で、本病の被害を回避するため、もっとも効果的な方法は、短命でない（永続きのする）抵抗性をもつ品種を栽培することである。現在、作物としてすぐれた特性を備え、真正抵抗性遺伝子（major gene, R）をもっていないが、「ほ場抵抗性」（field resistance, horizontal resistance）を示す系統の選抜に力が入れている。

「真正抵抗性」は、多くの場合その抵抗性が永続きせず、それがために、ほ場抵抗性についての選抜をより難しくして、育種上障害となることがある。

今後、疫病防除に関する研究については、寄主と病原との相互の影響、抵抗性品種の育種、個体のもつ抵抗性を見わけて評価する方法、などに力が集中されるであろう。

（秋元 喜弘）